



永井直勝の功績

戦国時代の大名は家康支配下の長田一族が治めていました。長田伝八郎（後の永井直勝）は14歳で家康の子信康に仕え、その後実力が認められ今度は家康に仕えることとなりました。その際に、家康の命令で姓を永井と改めました。

一五八四年、永井伝八郎は家康軍として小牧長久手の戦いに臨み、豊臣軍の池田恒興を討ち取りました。池田恒興は清須会議のメンバーであり、豊臣軍の中心的な存在であったため、その功績は高く評価されることとなりました。その後名を直勝と改めています。

永井直勝の子孫には、小説家の永井荷風、三島由紀夫、狂言師の野村萬斎などがいます。

用語解説

- ▼信康（一五五九〜七九）：徳川家康の長男。岡崎城主。
- ▼池田恒興（一五三六〜八四）：織田信長、豊臣秀吉に仕える。
- ▼清須会議：本能寺の変の後、織田信長の後継者を決めるため、清須城で開かれた会議。

永井直勝生誕の地

碧南市音羽町にある宝珠寺は永井直勝の生誕の地と言われています。



△宝珠寺



△永井直勝像
(宝珠寺蔵)

三英傑へきなんの公式 Instagram (@hekinan_saneiketsu) では、碧南市と三英傑に関する情報を随時掲載しています。



碧南の歴史へのいざない

問 文化財課内市史資料調査室 41-4566

No.103 水辺の記憶(2)

如光の伝説、西端の蓮如さん

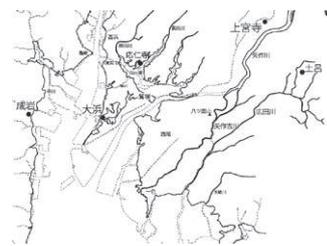
油ヶ淵周辺は江戸時代の初期までは三河湾から奥まった入り江でした。北浦ともいわれました。中世には大浜をはじめ、鷲塚、西端辺りに港や船着き場があり、大小の船が人や荷物を載せて行き交い、文化・経済の拠点でした。

蓮如を三河へ導いた如光は西端の出身で、佐々木(岡崎市)上宮寺の住職でした。伝説では、油ヶ淵の水面上から生まれたなどといわれます。

江戸時代の話では、応仁二年(一四六八)五月、如光の招きに蓮如は三河を訪れ、順路は不明ですが、西端、鷲塚から三河湾へ出、現在の矢作古川、広田川を遡って土呂(岡崎市福岡町)に達し、そこを拠点に三河一帯を布教したともいわれています。



△昭和3年(1928)建立の如光堂
昭和20年(1945)地震により倒壊した(原田三郎氏撮影)



△室町時代の海岸線の推測図
点線は現代の海岸線と川筋

西端の人々は、蓮如の再訪を願って新たな住職は置かず、ゆかりの道場を守り続けました。太平の世となった元禄年間(一六八八〜一七〇三)に「応仁寺」と寺号(寺の名前)を認められました。蓮如忌を盛大に催すようになったのはこの頃からです。娯楽を制限された江戸時代でも寺社参詣は特別でした。『参河堤』(天明末年〜寛政二年(一七八八〜九〇))には「毎月十九日ヨリ近国ノ徒群集メ恰モ如市」と記されています。応仁寺を中心とする西端の蓮如忌法要は、敬意と親しみを込めて「蓮如さん」と呼ばれ、パズル的な要素を含みつつ、三河のみならず、広く知多からも渡し舟を使って参詣する人でにぎわいました。

伝承の中に生き続ける人々の願いや祈りを丁寧によく取りたいものです。